



二尊院の「素庵夫妻の墓」と『大覚寺文書』収載の『角倉與一（素庵）書状』について

| | |
|-----|---|
| 著者 | 林 進 |
| 雑誌名 | 阡陵：関西大学博物館彙報 |
| 巻 | 76 |
| ページ | 4-7 |
| 発行年 | 2018-03-31 |
| URL | http://hdl.handle.net/10112/00023798 |

二尊院の「素庵夫妻の墓」と『大覚寺文書』収載の『角倉與一(素庵)書状』について

林 進

角倉素庵（1571～1632）は、近世初期、朱印船による安南（ベトナム）貿易、保津川や〈京都〉高瀬川運河などの河川開鑿事業に多大な業績を残した京都の実業家である。いっぽう生涯、藤原惺窩門の儒学者でもあった。本姓は吉田、名は与一、諱は玄之（はるゆき）、のち貞順、字は子元、号は期遠、西山、元和五年（1619）に隠居し素庵と号した。素庵は晩年、寛永四年（1627）に洛西・嵯峨の家を出て、清涼寺の西隣に隠棲し、寛永九年（1632）六月二十二日に没した。享年六十二。

嵐山にある千光寺大悲閣所蔵の『吉田子元(素庵)行状木碑』（堀杏庵撰文、寛永十年四月建碑）には、「同壬申（寛永九年）三月、公（素庵）は病に臥す、門人（和田）宗充を召し、訓戒を作りて二子（注：京角倉初代の玄紀、嵯峨角倉初代の巖昭）に遣して曰く、我死すれば、則ち西山の麓に葬り、〈貞子元之墓〉と書せと云う、地理の書、風水の術、兼学を以っての故なり」（原文は漢文）とある。

素庵は晩年に患った悪疾（ハンセン病）が家名を汚したとの思いから、菩提寺である〈嵯峨〉二尊院の吉田・角倉家の墓所に葬られるのではなく、奥嵯峨の「西山」（小倉山のこと）の麓、中世以来の無常所「化野」（あだしの）に葬られることを希望した。中国・朝鮮で古からおこ

なわれた《風水地理》の思想、すなわち良き墳墓を得れば、死者は長く幸を受け、その子孫は長く繁栄する、という説に基づいてのことである。寛政（1789～1800）の頃に編纂された『角倉玄匡系譜』、『寛政重修諸家譜』には、その墳墓は「化野平山」にあると記されている。素庵の遺命によって建てられた「貞子元之墓」は今も、そこに立っている（写真1）。

素庵没後、角倉一族は素庵という人間をどのように見ていたのか。

現在、二尊院の吉田・角倉一族の墓所には、墓石群中央の基壇上に「角倉了以夫妻（素庵の両親）の墓」（左の二基）と「素庵夫妻の墓」（右の二基）の四基が並んである（写真2）。

嵯峨角倉末裔の吉田周平氏（奈良県三郷町）によれば、素庵の長子玄紀から八代後の與一玄匡の奥方が文政三年（1820）八月十九日に死去した後に作成された京角倉墓の絵図面には了以夫妻、素庵夫妻の四基の墓が記されており、現行通りである。しかし文化十年（1813）に「了以翁二百回忌」があったが、「素庵貞子元」の墓が新たに造られたという記述は今のところ見当たらない。文化四年（1807）六月、二尊院廟所について記した西（嵯峨）角倉の調書があるが、それにも素庵の墓についての記載がない。文化四年の時点では、「素庵貞子元」の墓は二



写真1 角倉素庵の墓 〈嵯峨〉化野平山
銘「貞子元之墓 子元吉田素庵ノ之字也諱順」



写真2 角倉了以夫妻の墓（左）、素庵夫妻の墓（右）
〈嵯峨〉二尊院

尊院になかったのではないかと吉田氏は考えている。素庵の墓が二尊院の墓所に新たに造立された時期や経緯は、いまだ不明である。

※

嵯峨にある門跡寺院・大覚寺に伝来した文書を集成した『大覚寺文書』（上下巻・二冊、大覚寺史資料編纂室編、大覚寺発行、昭和五十五年〈1980〉）のうち、上巻に『井法橋宛 角倉與一（素庵）書状』一通が収載されている。

『大覚寺文書』の編集委員は、〈代表〉中村直勝、林屋辰三郎、足立雅子、川嶋将生、下坂守の五氏で、いずれの方も日本史学、古文書学の碩学である。すべての文書には釈文がつけられている。上巻には大覚寺所蔵文書のうち、寺務に関する文書と、元大覚寺坊官の井関家伝来の「井関家文書」、および尊経閣文庫所蔵の「大覚寺文書」が収録されている。他所の文書を収載した理由は、寺史を明らかにする上で、重要な史料であるからだとしている。文書は慶長(1596～1614)末年以前のもを収録したという。なお下巻には大覚寺所蔵文書のうち、江戸時代の書状類が収録されている。上巻収載の当該『井法橋宛 角倉與一書状』は「井関家文書」のうちの一通である。図版は掲載されていない。つぎに本書状の釈文を記す。

昨日之御状、他
行仕候而、今
朝拝見申候、仍
孟子之此の事、
承候、此方ニハ
孟子ハ無之候、
中庸と孝経と
両冊候、但壹度
上申候、此の事ニ候哉、
不存候間、先一筆
如此候、御報
待申候、恐惶頓首、
吉與一（花押）
廿三日
井法橋
人々御中

宛名の「井法橋」の「井」とは、大覚寺の寺務を司った坊官家の筆頭である井関氏の略した

言い方で、中国風の呼称である。法橋は法印(極位)、法眼につぐ三番目の僧位で、名家では比較的若い年齢のときに叙せられる。本来、「井関殿」「井関法眼殿」のように敬称をつけるのが慣わしであるが、ここでは簡略な書き方をしているので、井法橋と素庵の二人は親しい間柄で、同年配かと思われる。とすれば、井法橋は井関性慶(法印宮内卿、寛永六年〈1629〉六月十七日没)のことと推察される。

大覚寺坊官の下位に属し、同じく寺務を司る家を「家士」という。角倉宗家の土倉業・角倉栄可(了以の従弟)の系統がこの家士にあたる。素庵が井関法橋と親しい関係をもっていたのは、そういう事情があったからだ。本書状の内容は、つぎの通りである。

「昨日頂戴しましたお手紙、他所に用事で参っておりましたので、今朝、拝見いたしました。『孟子』(「四書」の一つ、他に『大学』『中庸』『論語』がある)のこと、承りました。当方には、現在、『孟子』は在庫していません。『中庸』と『孝経(古文孝経のこと)』(経書の一つ)の両冊は在庫しています。ご要望の『孟子』は、いま一度、本に仕上げます。これでよろしいでしょうか。当該本がございませんので、とり急ぎ、手紙にてお知らせいたします。『孟子』が出来上がり次第、お知らせいたしますので、しばらくお待ちください」。

この書状から、素庵が嵯峨の古活字版印刷・製本工房のごく近くに居住していたことがはじめて明らかになった。

井関法橋より『孟子』一部の注文を受けた素庵は、自身が経営する角倉邸内の印刷・製本工房において、『孟子』の《不足分の丁》(一丁は二頁)を調べ、その不足分について新たに木活字を植字し、摺刷し、その《摺刷分の丁》を《既存分の丁》に合わせ、製本するように配下の職人に指示した。

工房の製本部屋の整理棚には漢籍ごとに、すでに摺刷してあった各丁が順番に置かれており、新たに摺刷された丁は、いわゆる「異版」として整理棚に収納されたと推測される。

この『素庵書状』にある『孟子』『中庸』は『大学』『論語』の二書を合わせ「四書」として、同じ版式、同じ活字で印刷された、いわゆる《合刻本》と思われる。

宮内庁書陵部所蔵の古活字版『(漢趙岐注)孟子』(全十四卷・七冊、《下村生蔵刊本》とされる)は、第一冊46丁、第二冊41丁、第三冊40丁、第四冊39丁、第五冊38丁、第六冊40丁、第七冊45丁、合計289丁であり、「四書」「五経」のなかでも大部な本に属する(高木浩明「古活字版悉皆調査目録稿(八)」『書籍文化史』第18集、2017年)。一丁ずつ植字、摺刷、解版をくり返す古活字版の印刷工程は、増刷が容易な整版(木版印刷)と違って、たいへんな労力と時間を必要とする。古活字版の増刷の場合、不足分の丁がどれだけあるかが本の製作日数を決める。

さて、素庵の叔父である吉田宗恂(慶長十五年没、1558~1610)は、意庵と号した医師であり、藤原惺窩の門人でもある。父は天龍寺妙智院三世・策彦周良に従って二度入明した名医宗桂、兄は了以である。彼は蔵書家として知られ、文庫名を「称意館」(父宗桂の文庫を継承する)といった。宗恂は文祿(1592~1595)末年から慶長(1596~1614)前半、開版事業に素庵とともに深く携わっていた人物である。

慶長三年(1598)二月二十一日、公家の山科言経(やましな・ときつぐ)は知友の意庵(宗恂)のもとへ出向き、『大学』『中庸』『孟子』の《注本》(付注本、注釈本のこと)を息子阿茶丸のために購求した。この三本は《新作》(新刻)の「一字ハン〈板〉」(古活字版のこと)であると特記している。この購求には内々の約束があったという(『言経卿記』)。

言経から新刻の付注本『大学』『中庸』『孟子』の話聞いた興正寺昭玄は、自分もその三本を購入したく思い、言経にその仲介を依頼した。しかし言経自身も注文しているので、四月二十二日に二人の共通の友人である京の医師寿命院秦宗巴にその仲介を頼んだ。宗巴は意庵の友人であり、宗巴の著作『徒然草寿命院抄』(慶長六年の中院通勝の跋文がある)は慶長九年(1604)に如庵宗乾によって刊行された。宗乾は意庵の仮名と考えられる(森上修「初期古活字版の印行者について—嵯峨の角倉(吉田)素庵をめぐる—」『ビブリア』第100号、1993年、天理大学附属天理図書館)。

五月十三日に昭玄分の書籍代銀子十二匁は、宗巴を介して意庵に支払われた。いっぽう、同日に言経は意庵邸に行き、直接阿茶丸分の銀子十二匁を支払った。その後、言経は意庵に新刻の『論語』を注文し、九月に受け取った(『言経卿記』)。結局、言経は意庵から新刻の付注本「四書」を購入したことになる。

ところで、慶応義塾図書館所蔵の『中庸(中庸章句)』は、「中庸」の末に「補音釈」を一丁附載し、その裏葉第七行左下に「下村生蔵刊」の刊記を有している。この下村生蔵刊『中庸』の表紙は淡茶色表紙原装、25.9×19.3糎。四周双辺有界、每半葉七行十七字、注小字双行、匡郭内(21.7×15.9糎)。版心は双花口魚尾で白口、中縫に「中庸章句、丁付」とある。活字の大きさは縦1.2糎、横1.4糎、小字が縦約1.1糎、横0.6糎である。活字の字様は丸味を帯びた大振りの落ちついた感じの字形である。活字書体は、朝鮮銅活字のうち、1434年(甲寅)に作成された、いわゆる《甲寅字》に共通する特徴をもっている(川瀬一馬『新修成篁堂文庫善本書目』1992年、お茶の水図書館)。

この下村生蔵刊『中庸(中庸章句)』と同じ版式、同じ活字で印刷されている宮内庁書陵部所蔵の無刊記本『論語(論語集解)』(写真3)も、下村生蔵が刊行したものと考えられる。この書陵部本には白文方印「吉家/氏蔵」の印章が捺されている。同じ版本の西尾市・岩瀬文庫の『論語』にも同じ印章が捺されている。この印章は宗恂の蔵書印である。宗恂が同じ『論語』を二本架蔵しているので、彼はその出版に関与した人と考えられる。下村生蔵刊『中庸』(慶大本

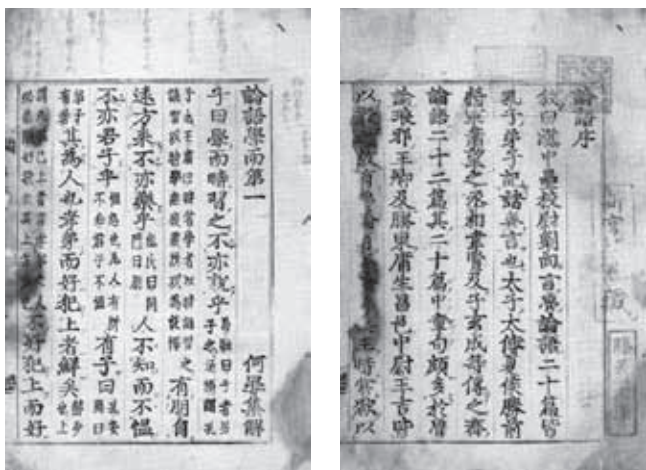


写真3 『論語(論語集解)』(吉田宗恂旧蔵)宮内庁書陵部蔵 [匡郭は四周双辺、(序) 21.6×15.2糎]

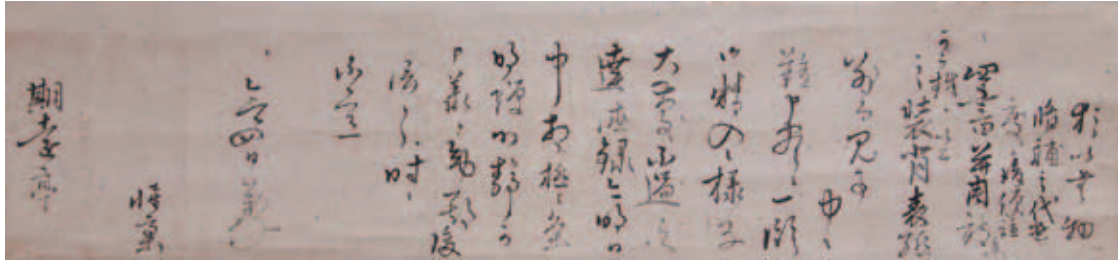


写真4 『期遠亭(素庵)宛 藤原惺窩(惺斎)書状』 個人蔵

ほか、二本)と同じ版式、同じ活字の無刊記本『論語』(書陵部本、岩瀬文庫本ほか、三本)以外に、同じ版式・活字の無刊記本『(漢趙岐注)孟子』(書陵部本、東洋文庫本ほか、八本)、同『大学(大学章句)』(二本)が現存している。これらは《合刻本》であり、《下村生蔵刊本》とよばれる(高橋智「慶長刊大学中庸章句の研究」『斯道文庫論集』第32号、1998年)。

言経が意庵に注文した新刻の付注本「四書」、すなわち『大学章句』『中庸章句』『論語集解』『(漢趙岐注)孟子』は、前述の《下村生蔵刊本》の「四書」に相当するものと推察される。この「四書」は、宗恂の甥である素庵が嗟峨の印刷・製本工房において刊行したものであろう。

素庵が慶長十四年(1609)に刊行した《嗟峨本》古活字版『伊勢物語聞書(肖聞抄)』(国会図書館蔵)の中巻、後表紙の裏貼りの中から、下村生蔵刊の古活字版『元亨釈書』(慶長十年刊)の《刷り破(や)れ》(印刷の反故紙)半葉が発見された。また、大東急記念文庫蔵本の中からも、同種の反故紙が見出された。そうすると、生蔵は《嗟峨本》の出版に関係した人物ということになる。おそらく素庵と生蔵の二人は古活字版の漢籍・医書・仏書、および古活字版・整版の《嗟峨本》を出版した共同制作者と考えられる。生蔵は素庵より嗟峨の印刷・製本工房の職人たちを統括する責任を任されていた人物ではないか。前述の慶応義塾図書館本『中庸』にある「下村生蔵刊」の刊記は出版物の「刊記」ではなく、工房における印刷責任者の《証し》のようなものであろう。素庵は出版物の刊記や奥書にいっさい名前を記していない。素庵は自己の業績を誇示することを欲しないという老子の思想をもっていた人ではなかったか。

新出史料『期遠亭(素庵)宛 藤原惺窩書状』(個人蔵、写真4)には「(素庵から贈呈された)

四書並周詩之装背表紙、別而見事」の文言がある。よって、わたしは素庵が慶長四年(1599)頃に古活字版「四書」、『周詩(詩経、毛詩)』(五経の一つ)を刊行し、自ら表紙の装訂をおこなっていた事実を指摘した(拙論「角倉素庵とキリシタン版・古活字版・嗟峨本」、豊島正之編著『キリシタンと出版』所収、2013年、八木書店)。その内容は前述の意庵の「四書」と関係し、『井法橋宛 角倉與一書状』に通じる。

慶長の前半、嗟峨の印刷・製本工房では、古活字版による漢籍や大部な中国史書『史記』(袋綴装、大本、有界八行本、百三十巻・五十冊、国立公文書館内閣文庫本ほか多数現存)などが刊行された。それと並行して、漢字に平仮名を交えて印刷する国書の《嗟峨本》の出版が準備されていた。そして慶長八年(1603)以前に、美しい装訂になる最初の《嗟峨本》、古活字版『徒然草』(袋綴装、上下二巻・二冊、雁皮の本文料紙には紫苑模様などの雲母刷文様が施されている。写真5)が刊行された(小秋元段「嗟峨本『史記』の書誌的考察」『太平記と古活字版の時代』所収、2006年、新典社)。



写真5 嗟峨本『徒然草』 個人蔵

元大和文華館学芸員
大手前大学非常勤講師